
二十歳過ぎれば

午雲堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二十歳過ぎれば

【Nコード】

N8647F

【作者名】

午雲堂

【あらすじ】

元、天才少年と呼ばれていた高橋は、今では平凡な男として暮らしている。どこかぼんやりしている彼のことを妻が見かねて……

その日は日曜日で、高橋は子供と一緒にテレビゲームをしていた。彼の息子はテレビゲームが上手で、対戦するといつも彼の方が負けてしまう。

朝からベースボールをやり、昼からバトルし、夜から仲良くロールプレイングした。

正義の味方がパーティを組み、敵を倒しながら宝探しをする。

途中何回も敵にやられて死んでは生き返り、経験を積み重ねてゆく。

親子で知恵をしぼって最善の方法を捜しつつづける、その過程が面白いのだ。

コントローラーでキャラクターを動かしながら、画面を見つめている時だった。

「ゲームの中の人達はいいな…」

息子がぼつりと言った。

「どうして？」

「だって、何回でもやり直せるんだもん。」

高橋は何食わぬ顔をしていたが、内心はギョツとしていた。

息子はまだ小学生で、とてもそんなことをつぶやく年頃ではなかったからだ。

もっとも最近の子供は早熟だというから、それなりに考えることはあるのかもしれない。

(子供でも思うくらいだ、ましてやおれなんて…)

高橋は息子の横顔をみながら、ひそかに苦笑していた。

(できるものなら、人生リセットしたいよ…)

高橋は今でこそしがないサラリーマンだが、これでも昔は天才少

年だった。

小学生の時、IQテストを受け、遊び半分にやったのに、あとで先生から、

「君のIQは180だよ」

と、こっそり耳打ちされた。

野球をさせれば4番でサード、彼の活躍で彼のチームは小学生大会で優勝した。

（あの頃がおれの栄光の時代だった…）
と高橋は思う。

彼は小学生の時から背が低かったのだが、なぜかそれからもほとんど背が伸びなかった。

それで結局野球はあきらめてしまい、彼は勉学に打ち込むことになった。

IQと勉強との間にどんな関係があるのかしらないが、彼の学習能力ははずば抜けていて、

「高橋君はT大に行ける」

と後押しされながら、私立の有名進学校へ進学した。

公立高校と違ってそこは男子校で、しかも全寮制、そして授業は異常に厳しかった。

彼は勉強のしすぎで身体をこわしてしまい、やむなくそこを中退した。

公立高校に編入して、なんとなく卒業し、気がつくと大学生になっていた。

その頃になってやっと背が伸びだし、どうにか人並みの身長になったが、

「成績優秀、スポーツ万能の天才少年」

は、気がつくと、ただのオヤジになっていた。

（おれには無限の可能性があったはずなのに、どうしてこんな人生になったのだろう）

高橋は折りにふれて、何度となくそう思うのだった。

夜になって息子は寝てしまい、高橋は妻と枕を並べていた。

「どうしたの、元気ないみたいね」

高橋の顔色をみて、妻が問いかけてきた。

「うん、今日あいつがね…」

高橋は息子の話をした。

「子供でもそんなこと考えるのになって、ちょっとびっくりしたんだ。」

すると妻はニヤリとして、高橋の顔を見返した。

「それで、またあなたも人生やり直したいなんて思ったの？」

「ん？うむ…」

妻は高橋の心の中など、テレパスみたくお見通しなのだった。

「そうよね…わたしもやっぱりやり直した方がいいと思うわ。」

妻が驚くほどあっさりと言った。

「そんなことできるわけがないだろ！」

高橋は目をぱちくりさせて、妻の顔を見返した。

「できるわよ」

妻は元気に言い返してきた。

「私もこのままじゃもつたいたいと思うの。思い切ってリセットしてみるべきだわ。」

「リセット？」

妻の表情はいたって平気だった。

「実はわたし四次元人間なのよ。だからあなたの人生をリセットすることができるの。」

「四次元？」

「そう！」

妻はあっけらかんとして、それから超自然的な事実を説明してくれた。

二次元を投影したものが一次元で、三次元を投影したものが二次

元…。

だから三次元世界は四次元世界を投影したもの…。

「わかりやすくいえば、テレビゲームみたいなものよ」と妻が言った。

「二次元の平面に三次元の物体を投影してあなたたちは遊んでるでしょ」

「うん」

「私たちは三次元の空間に四次元の物体を投影して操作してるのよ」「ふーん…」

彼も頭は悪い方ではないので、理屈だけはのみこめた。

妻はこれからピクニックにでも行くみたいな顔をして、さっそく跳ね起きていた。

「さあ、そうときまったら善は急げよ、リセットするから目をつぶってちょうだい。」

「ん？うん。」

彼は命じられるままに目を閉じた。

なんとなく言うことを聞きたくなる、妻はそんなヤツだった。

視界が暗闇に包まれて、意味不明な記号が頭の中を駆けめぐった。気がつくと、彼はランドセルを背負っていた。

「あれ？」

彼は歩道にたたずんで、キョロキョロしていた。

「子供になってるー！」

(記憶はそのままだぞ?)

彼は自分の短い手足をみて、ポカンとしていた。

「どっ？見事なもんでしょ！」

見ると、かたわらに、きれいなお姉さんが立っていた。

ここにこして、こちらをのぞきこんでいる。

「リセットしても経験値はそのままなのよ。だから記憶も元のまま

なの。」

「ふーん」

高橋は妻みたいなしゃべり方をするお姉さんの顔を見上げた。

「じゃ、おれはこのまま学校に行ってもいいのか？」

「そう。行けばいいの」

お姉さんにはっこりしてうなづきかけた。

「今度は立派な人になってよ。あなたは期待されてるんだから。」

「うん」

高橋は満面を笑みにして、子供のようにうなづいた。

「きつと立派な人になるよ。ぼくのなりたかった人間になってみせ

る！」

お姉さんはそれを聞いて、元気にこぶしを振り上げた。

「そう、その意気よ。さあ、行ってらっしゃい。思う存分やってく

るのよ！」

「うん！」

高橋は前を向くと、一目散に駆け出そうとした。

「あ、ちよつと待って！」

そのとき、お姉さんがあわてて彼を呼び止めた。

「なに？」

振り向く彼に、お姉さんはこう伝えた。

「実はね、リセットするとステージのレベルが上がるのよ。言うの

忘れてたけど……」

「平気だよ。ぼくは子供の頃から天才少年っていわれてたんだから

！」

彼は元気に言って、力強く胸をたたいてみせた。

「まかशीといて！」

「うん。またね。」

お姉さんは軽く身をかがめて、彼の方に手を振ってみせた。

「バイバイ！」

彼はお姉さんの何十倍かの勢いで手を振って、歩道を駆けて行っ

た。

学校に行ってみると、そこにいるのは自称、天才少年ばかりだった。

(後書き)

！ 日本には天才が多いな、と友人をみるたびに思います。ありがとう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8647f/>

二十歳過ぎれば

2011年10月23日16時02分発行